子育ては相互扶助で

アフリカのパパ・ママから学ぶ

京でシンポ

頼もしい「ご近所さん」

集団で〝自然に〟助け合い

日本で子育てするエチオピア人女性とアフリカの狩猟採集民を研究する識者、福島県の母親が育児をテーマに語り合うシンポジウム「アフリカのパパ・ママから学ぶ子育て」が、京都市内であった。接点のなさそうな3人をつないだキーワードは「相互扶助」。大人同士、子ども同士、大人と子どもが食事を共にしたり一緒に遊ぶ中で、自然に生まれる助け合いの意味が浮かび上がった。

京都府国際センターと日本とアフリカの交流を進めるNPO法人「アフリック・アフリカ」（京都市）が主催、約50人が聴講した。最初に日本在住のエチオピア人ジャーナリスト、ヒビテ・テスファイエさんが結婚・育児をめぐる母国の状況をテーマに講演した。母親の役割が非常に重視されている面や父親の育児参加が進みつつある面は日本と共通だが、ヒビテさんが強調したのは近隣住民の存在感の大きさ。

女性1人当たりの平均出産人数が4・35人（2009年）のエチオピアでは、預かった家の人が食事や母乳を与えるのは当然で、しつけもする。「日本のように預ける時にいろいろ用意したり、預かる側が気を使うことはまずない」と「ご近所さん」の頼もしさを感じさせた。

子どもの連帯

日本と同じように母親の役割が重視されながらも子ども同士の強い連帯があることを話したのは、京都大の高田明准教授。アフリカ南部に暮らす狩猟採集民の研究を続ける高田さんは、ビデオ映像を交えて子どもの遊びの様子を紹介した。

年長児の誘いで踊りの輪に参加した年少児は、多少タイミングがずれていても年長児から受け入れられ、同じ踊りの輪で楽しむ。高田さんは「多年齢からなる子ども集団の愛着は強い」と、母子密着の中のみで過ごすことの多い日本の乳幼児とは異なる姿を紹介した。

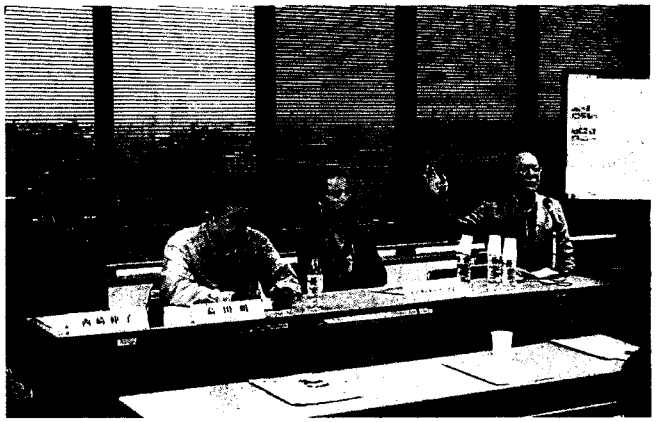
日本でも必要

また、福島県で小学生の子どもを育てる福島大の西崎伸子准教授は、原発事故の影響を心配する母親の立場からアフリカでの子育ての体験を語った。

被ばく量を減らすため、夏休みを利用してボツワナでの研究活動に子どもを伴った西崎さんは、集団の中にわが子をごく自然に引き入れてくれた現地の子の様子に感動したといい、「子ども同士の集団の意味を肌で感じた」と話した。

「不安の中で皆が平静を装って生活している」と現状を表現する西崎さん。今の地域にはアフリカに健在の相互扶助こそ大切ではないかと考えるという。震災後、他府県の人の協力を得ながら子どもたちの一時保養を企画した例を挙げ、「行政に依存しすぎず安心安全な社会をつくっていくために、アフリカで体験したような相互扶助ネットワークを日本でも大切にしたい」と話した。

（太田敦子）



それぞれの立場で見聞したアフリカの子育てを語り合う研究者ら（京都市下京区・京都府国際センター）

エチオピア女性や研究者 体験語る

パパも育児のプロになろう

府助産師会が講座

来月9日、中京で

京都府助産師会は2012年1月9日午前10時から、京都市中京区西ノ京の府助産師会館で「パパも育児のプロになる！ 家族のためのハッピー講座」を初めて開く。

対象は赤ちゃんから小学校低学年の子どもと、その父親。子育てに関する夫婦間のコミュニケーションについて考えたり、子どもがリラックスできるマッサージや親子ヨガのレッスンがある。

定員は先着15組。参加費は親子で千円。ランチタイムもある（弁当は別料金）。申し込みはメール〈kyoto-midwife@ray.ocn.ne.jp〉か、ファクス075(841)1521で。問い合わせはファクスと同じ電話番号で（平日午前10時～午後3時）。

こまど

ありがとう

福本　澄子

「家から琵琶湖が見えるって、家から富士山が見えるのと同じくらい価値があるわ」と、遊びにきた友人が言ってくれた。

引っ越してきた時、毎日琵琶湖を見るのが楽しみだった。掃除をしながら2階の窓から。ベランダで洗濯物を干しながら。飽かずに琵琶湖を眺めていた。今でも毎朝一番にカーテンを開けて、まず琵琶湖を見る。

日によって湖面の色が異なる。濃い青、淡い青、灰色に近い時もある。晴れた日の真っ青な琵琶湖は、まさに日本一の湖だ。夜、月の光が湖面を照らし、輝きわたっているのを見た時は、思わず息をのんだ。小雨が降った後、湖面から山の端まで大きな虹がかかるのを見て驚嘆。正真正銘の虹の橋だ。お金では買えないぜいたく。

先日、琵琶湖一周手をつなぐ「抱きしめてBIWAKO」のイベントにも参加した。命の水を満々とたたえる琵琶湖を目の前にして、深く頭を垂れ「ありがとう」と何度もつぶやいた。

（大津市・67歳・主婦）

先生教えて！ 22

Q 5カ月男児です。生まれた時から目が水平に振れるのですが、大丈夫ですか。

A 基本的に絶えず返す眼球の振れを「眼振（がんしん）」といいます。乳幼児にみられる両側性の眼振の多くは「先天眼振」によるものです。

先天眼振は、生まれた直後もしくは生後数カ月以内に、目が常に左右（水平）あるいは上下（垂直）に規則正しく動いている（水平性眼振が多い）ことが特徴です。

例の割合で、多くは原因不明です。家族内に複数の患者がみられる場合もあり、遺伝の関与も指摘されています。

常に眼球が動いているにもかかわらず、視力は正常で、周囲が揺れて見えたり体の動きが悪くなったりする（転びやすい、歩きにくい、ふらふらする）こともなく、普通のくなり、分かりにくくなります。

ただし、眼振の大きさが最も小さくなるような

いため、無意識にその位置を保とうとした結果、斜視を合併したり頭の位置が傾いたりすることもあります。

場合は手術を含めた対策が必要になります。

一方、脳（てんかん、脳腫瘍、脳出血・梗塞）、内耳（三半規管）の病気で眼振を伴う場合もありますので、眼振に気付いた場合は念のため眼科か小児科の受診をお勧めします。

（大阪市立大学大学院医学研究科教授・三村治）

京あんしんこども館・電話相談より

相談専用☎ 075 (231) 8005

きょうの料理

2人分

豚のしょうゆマスタードソース

豚ロース肉とんかつ用8枚、プチトマト4個、シイタケ4枚を用意します。

豚肉は筋切りをして、両面に塩、こしょう各少々を振ります。プチトマトは、たを取り除き、シイタケは薄切りにします。フライパンにオリーブ油小さじ1を熱し、プチトマトとシイタケをさっと炒め、塩、こしょうで味を調えて取りだし、添え物を作ります。

フライパンにオリーブ油大さじ1を熱し、豚肉を表面焼き色がつくまで焼きます。白ワイン大さじ2を加え、ふたをして2分ほど蒸